加茂里山通信
平成27年 秋号
発行　市原商工会議所
加茂里山通信編集部
編集長　征矢貫造

県下No.1に輝く！
加茂支団第３分団

７月２５日の第５１回県消防操法大会において小型ポンプ操法の部で最優秀賞を勝ち取った市原市消防団加茂支団第３分団の鶴岡公徳分団長に手記を寄せていただきました。

加茂地区、そして市原市・千葉市の皆様のお力添えをいただき、千葉支部の代表として、第５１回千葉県消防操法大会小型ポンプ操法の部において、最優秀賞を獲得することができました。自分達だけの力では決して成し遂げられない結果です。本当にありがとうございました。

大会を勝ち進んでいくごとに、加茂支団、市原市、千葉支部の代表としてのプレッシャーは大きくなっていきましたが、加茂地区に１４年振りに優勝旗を持って帰ってくることができ、ホッとしております。

５月２４日の加茂支団大会突破以降は、加茂分署の皆様に熱心なご指導をいただき、三原加茂支団長の指揮のもと操法訓練に臨みました。この間、加茂支団本部・加茂地区の他の分団員の皆様に大変お世話になりました。中でも、訓練が長期間に渡る中、人を集めていただいた各分団長の皆様の苦労を思うと、本当に頭が下がります。

市原市の代表となってからは、市原市消防局の皆様、中山団長をはじめとする市原市消防団・各支団の皆様のご協力もいただき、千葉支部大会、千葉県大会と勝ち進んでいくことができました。この間の訓練では、実はなかなか結果を出せない日々が続き、関係者各位の血圧を上昇させてしまったことを、この場を借りましてお詫びいたします。

ひときわ高くひるがえる第三分団ののぼり

県消防操法大会最優秀賞！

振り返るとあっという間の出来事のように思えます。３月末から始めた訓練もどんどん暑くなっていく中で、選手は大変な思いの中、頑張ってくれました。選手を支える各３分団員も、夜勤前、仕事の合間、あるいは会社を休んでの訓練参加と、苦労ばかりかけてしまいました。地元町会(久保・山口・駒込・外部田)の皆様には、県大会出場に際し援助をいただいた上、大会終了後には「よくやったね、頑張ったね」と温かい言葉をたくさんいただきました。３分団ＯＢの皆様にも多大なるご支援をいただきました。県大会会場に到着すると「加茂支団第三分団」と書かれた高い高いのぼりが目に入り、感動しました。この感動が優勝への最後の後押しになったと思います。

地域にとって頼もしいメンバーです

現在、３分団は分団員２１名中、１０名が地元町会に住んでいません。千葉市や船橋市在住の団員もいます。４０歳の団員が５名もいます。加茂地区全体の流れとして他の分団においても同じような状況ではありますが、加茂地区で生まれ育った者として、何か役に立てることはないかという気持ちで消防団員を続けてくれています。我々消防団員は若い加茂地区のパワーを求めています。どうか、ぜひ周りを見渡していただき、若い方がいらっしゃいましたら「消防団に入ってみないか」と声をかけてあげてください。また、地元分団にご連絡をください。いつでも飛んで会いに行きます！！

（第３分団長　鶴岡公徳）

里トロッコ列車発進！
夢を形に変えて

８月３１日に小湊鐵道本社にて記者会見があり、トロッコ列車の発表会が行われました。受付をすますと軌道バイクで少し移動。そこで昔の車掌姿の女性から梨サイダーのもてなしと資料を手渡され、それから列車内に乗り込み、その列車がさらに屋根のある位置に移動してから記者会見は始まりました。この凝ってしゃれた演出に並々ならぬ意気込みが感じられました。

完成間近の機関車

里山の銀河鉄道のように

石川社長自ら里山トロッコ列車についての説明をしました。昔バイクに乗っていたが、ある時軌道バイクでレールを走ったとき、風を感じ、お日様を受け、野焼きのにおいをかぎ、５感がフル活動し、人間的感覚を伴うとびっきりパーソナルな、自分と里山が一つになる不思議なひと時を体験したといいます。その快感を多くの人に体感してほしいという思いがあり、プロジェクトはスタート。夢を形にする、しかしそれは単に夢ではなく、「ローカルはモーカル」として、採算を踏まえての決断。未来資産としての里山、首都圏に属する地の利、地域に存在するいくつもの里山の会の人の和、芸術祭でも注目されている天の時、それらの総合的な判断に基づくものであることも述べていました。エンジンはディーゼルながら、姿は蒸気機関車。そして車掌は昔ながらの黒い詰襟風の制服。汽笛を鳴らし蒸気のように煙を上げ、里山の夢の銀河鉄道として走るのももうすぐです。

（征矢里山通信員）

五井駅に雄姿を現した機関車

こども相撲開催される

新井地区にある神社で秋祭りが行われました。祭りの一週間前には、神社の氏子達が総出で境内の掃除および草刈りを行う宮薙という行事がありました。この神社は、面足神社(おもだるじんじゃ)といい、御祭神は面足之尊(オモダルノミコト)であり、人体の完成した状態を神格化した神を崇拝しています。そしてこの神社には土俵があるのです。

行司役は高滝神社の神主さん

以前は、大人の相撲を行っていましたが、時代の流れには勝てないもので参加者が集まらなくなり、いつからかこども相撲に代わっていきました。主役が大人から富山小学校の児童となり、加茂学園の生徒へと変わり、６年生から下は本当に小さな子まで、富山地区の子供達が兄弟姉妹のように相撲をとります。人の絆を大切にこれからもこの神社の相撲を継続していきたいと地域の人たちは考えています。

大人たちがいつも見守っています

（矢代里山通信員）

里山からの発信

越後妻有ツアー

牛久商店会と商工会議所南総支部の合同研修会に参加させてもらい、今回で6回目を数える新潟県越後妻有地区の「大地の芸術祭」のワンデーツアーに行ってきました。ほぼ予定通りに里山現代美術館「キナーレ」に到着。この美術館の前の盛り土のマンホール状の穴の中には、昨年のアートミックスでもおなじみの「もぐらTV」の開発好明さんが、同じようにもぐらの格好して放送開始前のスタンバイ状態でした。その向かいには市原湖畔美術館のジョーイ・リさんがいたので上から挨拶。ここから「光の館」「もぐらの館」とめぐり、お昼を「うぶすなの家」でとりました。ここでは事前打ち合わせがあり、働いている女性のお話を伺いました。彼女はおもてなしの参考にするために市原のアートミックスも見に来たそうです。雪深いこの地方ではこの大地の芸術祭が終了すると稲刈りが控えており、男衆はもちろんのこと女衆も忙しくなるとのことでした。この「うぶすなの家」は古民家を手入れしたもので、途中コンビニどころか商店もないような山道を登ったところにありました。ここに至る道すがら萩の花があちこちに点在しきれいでした。午後は松代の「農舞台」、そして松代の「山ノ家」というカフェで東京から来た経営者の女性から開店から今に至るまでの話を伺いました。

この大地の芸術祭は過去5回の芸術祭と20年間にわたる活動によって蓄積された約200の作品と、今回の新作約180点のアート作品群からなります。その開催面積は市原市のほぼ2倍の760平方キロです。この地域は豪雪地帯であり、芸術祭開催時期は夏です。翻って市原でのアートミックスを考えたとき、コンパクトな地域にいくつもの廃校があり、川があり、湖があり、小湊線が走り、菜の花と桜の季節に開催できる。そして東京からも近い。条件は越後よりはるかによいと考えられます。(但し、前回はそれだけ条件がいいのだから黙っていてもたくさんの人がやってくるだろうとの甘い見通しが、多くの関係者にあったのではないかと思います)次のことをいろいろ考えさせられるツアーでした。

9月28日のスーパームーン

自分を肯定する生き方

帰りのバスではビールも振る舞われ、疲れが出てきて眠くなる頃に映画が上映されました。北海道の洞爺湖のほとりにある小さなカフェの1年間の物語でした。主人公の水縞夫妻は夫が薪窯でパンを焼き、妻がコーヒーを入れ料理を作る。そこにやってくる3組のお客さんとの関わりを四季の移り変わりと共に撮ったものでした。物語は一種の寓話のようで、それはないだろうというツッコミどころもたくさんあったのですが、なぜか引き込まれ、揺れるバスの小さなモニター画面を見続けてしまいました。やきたてのパンや入れ立てのコーヒー、ダッチオーブンでストーブの火にかけられてゆっくり仕上げられていくポトフのおいしそうなこと。ていねいにゆっくり撮影されていたこと。

それらも確かに魅力だったのですが、この若い夫婦のことに夫の、自分を肯定する生き方に好感が持てたからでした。こんな会話があります。

「ご夫婦でやってらっしゃるんですか?」

「ええ、はい」

「こんな美味しいコーヒーを毎日飲めるなんていいですね」

「はい、いいです」

「仕事辞めたんですか?この店始めるために。思いきりましたね」

「ええ、好きな暮らしがしたいと思ったんです。好きな場所で好きな人と」

妻となるりえさんにいろいろな大変が重なった頃、二人は東京を離れ洞爺湖のほとりにやって来ました。夫の水縞くんにはひとつの願いがありました。1年が経ち、二人に世話になった老夫婦からお礼の手紙が届いてりえさんが心の底から笑顔を見せた時、その願いは叶いました。

自分の生き方を肯定して生きている人はどのくらいいるのだろうかと思いました。こんなはずではなかった。もっと違う人生があったのではなかったかという思い。自分を卑下したり、人に嫉妬したり、不甲斐なさを嘆いたり、愚痴を言ったり。それが人間と言えばそれまでですが、気負うことなく自分の生き方を素直に是として生きる。満足ではなく、自分の生きる方向に沿って生きている。そういう人生もあり、この映画の魅力と狙いがそこにあるような気がしました。

主演は大泉洋と原田知世、映画は「しあわせのパン」でした。

(征矢里山通信員)

加茂地区への思い

今年の「加茂地区市民まつり」は大学生のフラダンスの披露があったり子供たちの参加があったりと、今までにない意欲的な取り組みがありました。どういう意図のもとにどういう思いをよせて企画されたのか、また、また加茂地区の現状と問題点などについて、加茂里山通信50号の記念企画として宮原誠一加茂地区町会長会長に手記を寄せていただきました。

華麗なるフラダンス

住民のあきらめ感に抗して

今年も「加茂の誇り」の一つとしての「加茂地区市民まつり」を各町会の協力で盛会のうちに実施できました。音響で手伝ってくれた馬立や姉ヶ崎地区に住む方は、「このような祭りが実施できるのが羨ましい」と訴えていました。彼らの地区からは祭りが消えて、一段と寂しさを感じているようです。今日、加茂地区における様々な行事や取り組みは「維持か廃止」の選択が迫られる段階に入っています。支えている住民自身の気持ちにも「まだがんばろう・もうダメだ」が半々の状態です。

子供たちもがんばりました

こうした中にあって、長年に渡って加茂の誇りを掘り起し、発信し続けている「加茂里山通信」には、心より敬意を表するものです。そして何よりも里山通信は加茂地区に住み続ける強い意志を持つ住民への応援の必要と、そこに住む人々の誇りが「地域づくり」の要であることを教えてくれています。

行政が中心となる「地域づくり」は遅かれ早かれ「平準均一化」は免れないと思われます。そこに住む住民の「当事者意識の向上」と「地域への誇り」を伸ばす取り組みがなければ「地域づくり」は不可能です。全国の状況から判断すると、「後継者がいないこと」と「災害によるダメージ」が住民の諦め感に直結するのですが、これらを超える「強靭」な心を住民の中に創る役割を「里山通信」に期待するものです。

大学生と子供たちの踊り

本来は加茂地区の住民が一堂に会し、盆踊りを中心に交流することがその目的です。今年も動員されたとはいえ、皆さん本当に協力して盛り上げてくれました。参加者がもっともっと楽しいと思える企画を考えてつつ、毎年のように加茂地区町会長会の責任者たちは悩みながらこの市民まつりを継続してきています。景品を用意し参加を募った時もありました。今年は「大学生のフラダンス」を目玉に「子供たちの踊り」も企画しました。実行委員会の反省会は後日行われますが、最終的にはその年度ごとの「加茂地区町会長会の執行部」に委ねられています。

神田外語大を選んだ理由

比較的市原に近く、国際的な視野を持つ学生に「日本の田舎」の現状や良さを知ってもらいたいことと、将来的には若い外国人にも日本の田舎の一部を知ってもらいたいと考えたからです。今回は十分な交流はできませんでしたが、目新しい企画となり市民まつりに来た人たちも参加した大学生たちも喜んでくれたことと思います。こちらの働きかけ如何でもっと大きな交流も可能かと思われます。

神田外語大は英米語に加えてアジア圏の言語にも力を入れている学校で、「言葉は世界をつなぐ平和の礎」が教育理念です。今回はフラダンスサークルから13名が参加してくれ、若い華麗な踊りを6曲披露してくれました。音楽も踊りも若者らしいアレンジがあってか、見ていて楽しくなりました。20代の若者が極めて少ない加茂地区にあっては、嬉しい企画となったようです。

交流は双方に思いがなければ

この加茂地区は色々な形でさまざまな取り組みをしていますが、肝心の人とのつながり、人の広がりはなかなか難しいようです。さらにお金に絡む利害関係が生まれると争いが始まり、やがて消えていく運命にあります。併せて、人々の心に「楽しむ」余裕がないことです。「一度の人生、楽しもうよ!」は、口では言えても実践は難しいようです。

若い人たちや高齢の人たちとの交流も、それぞれの思いが空中に浮遊しているだけの世の中になっている状況で「里山通信」の役割は大きいと思います。若いコーディネーターの存在が求められています。若い人が、高齢者の愚痴、悩み、小さな希望を丁寧に聞き、「それでもこの地域で頑張りたい」という思いを掘り起こすようなことでも価値はあると思います。「思い」はすぐには具体化しないけれど、発信し続けることで誰かが受け止めて一歩を踏み出す可能性はあります。今まさに、キジもサルも爺さんも婆さんも居るけれど、「桃」と「桃太郎」が必要です。桃が流れて来るのを待つかどうかは議論の余地がありますが、今年の加茂地区町会長会は「桃」を意識しました。

(加茂地区町会長会長　宮原誠一)

こっもど紀行 アートいちばら「秋」の開催！

11月21日(土)から12月6日(日)の期間の土曜、日曜を中心に各会場で催されます。

「里見小」は芸術家による体験教室と地元有志による里山食堂が開店。春に好評だったカレーとオムライスが再登場するらしい。

古民家を再生した「あそうばらの谷」では地域の土を素材にした作品展示と農協婦人部が運営するおもてなしの心あふれた喫茶店がオープン。紅葉を楽しみながらゆったりと流れる時間を楽しめます。

高滝の「湖畔美術館」では巨匠シリーズの第3弾。浅葉克己展が開催されます。

「内田未来楽校」も企画展示とカフェがオープン。木造校舎の雰囲気を残した癒しになるはずです。

月崎の「森ラジオ」も癒しの空間。地元のオモテナシも作品のうち。

興味をそそったのは「月出小」のカフェトーク。各地で活躍するまち起こしの達人を招いてのトークショウ。

11月21日は尾道で空き家再生に取り組んでいる新田さん。

22日には岐阜市で地域の特産品づくりで成果を上げている山本さん。

23日は新潟からどぶろく特区や貸民家で地産地消に取り組んでいる若井さん。

28日は地元から小湊鉄道の石川社長をお招きして、市原の観光振興への取り組みを語っていただく。

最終日となる29日は東京で子供アトリエを運営する山成さんを招いて美術教育から生まれる子供たちの可能性を語っていただく予定。

いずれも13時からの開催で、予約も不要。古民家再生や地域の特産品づくり、地産地消など、国際芸術祭の先にあるもののヒントがもらえそうです。月出小の跡地が町おこしの拠点に変わっていく可能性を大きく感じさせてくれるイベントになりそうな予感がします。ぜひ足を運んでみてください。

（大曽根T里山通信員）

里山のご馳走

今年はきのこが豊作のようです。

天ぷら絶品です。きのこごはん

香茸

きのこごはん・バター焼き

房総松茸

煮物（白滝、ナスと一緒に）・みそ汁

一本しめじ

（大曽根R里山通信員）

満開の菜の花が見たい！ 花プロジェクト2015

9月26日に花プロジェクト2015として佐是から大久保駅までの小湊線沿線での菜の花の種まきが行われました。各駅には担当する団体がいます。上総大久保駅では「国本一心会」が午前8時に集合して、国本正木川周辺の種まきを終えてから大久保駅へ向かいました。この時点で小湊線は月崎駅までしか来ていませんので、線路の中を歩くのも余裕です。「花プロジェクト」は当日よりも準備が重要です。各駅ではボランティアの皆さんが事前に準備を進めます。この秋からトロッコ列車も始まることだし、小湊鉄道の一日も早い復旧を祈ります。

（大曽根R里山通信員）

上総大久保駅での種まき

和気あいあい体育祭

今年も天候不順のため、加茂公民館体育館での開催となりました。実行委員会の皆さんとしては本当は秋晴れの下で、広々とした加茂運動公園での開催と行きたいところだったでしょうが、私個人としては体育館での開催も結構好きなんです。狭い空間で、選手の皆さんと応援の皆さんとがなんとなく一体感が出てくる感じがしますし、会場全体の盛り上がりもあるように感じます。でも、来年は秋晴れの下で出来たらいいカモ。

体育館では独特な一体感が

（大曽根T里山通信員）

ぶっちゃけ楽しい 加茂地区敬老会

市原市の総人口約28万人のうち、敬老会に招待される資格（75歳以上）がある方々の数が約3万人。ちなみに100歳以上の方々が31人、最高齢が104歳となってます。加茂地区の75歳以上の方々は1、429人。今回の敬老会の参加者が314人（介添え人58人）。プログラムの中に富士山宝林寺住職・千葉公磁氏の講話があり、名僧・高僧のおもしろ話。「仏教が教える人生の極意」と題し、目で見て分かる標語集で会場の皆さんの心を掴み、その場に参加していればこそ堪能できるぶっちゃけぶりを披露して頂きました。午後からは加茂学園の生徒さん達の心のこもった力強い吹奏楽演奏から始まり、会場にいる参加者全員で行える緑祐の郷の演歌体操。笑いを誘う芝居と独楽（こま）の舞踊の昭和村。カラフルな衣装でダンスを披露した吉沢学園。身近で楽しめるように工夫した舞踊の高滝神明の里。敬老会を盛り上げるために、多くの方たちが日々練習を積み重ね、発表の日を迎えたことがわかりました。。

地域との繋がり、人との繋がりが年々と乏しくなっていく今日この頃ですが、老若男女が集える場をもっと広げる事が望ましいと感じました。

（矢代里山通信員）

今やテレビでおなじみの千葉さん

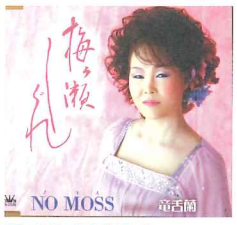
昭和村文化祭

日時　11月3日　午前9時～午後3時

会場　市原市万田野732番地6　社会福祉法人　昭和村

内容　五月流千都勢会舞踊発表会
加茂学園音楽部発表会
加茂地区保育園の作品展示
加茂学園児童、生徒の作品展示

人と環境が一体となって大切な未来へ
自然環境と人間との調和を目指して
杉田建材株式会社
本　社　市原市万田野 26　TEL 0436(96)1311
市原支店　市原市惣社1－1－22　TEL 0436(24)0511
南総支店　市原市牛久450－1　TEL 0436(50)0111
URL http://www.sugita-group.com/

作詞家&歌手 NO MOSS
(作詞家名：藤野美代&NO MOSS)
NO MOSSと歌仲間募集


DAM,UGA
JOYSOUND配信
問い合わせ
(株)音楽プロデュース NO MOSS
居酒屋 大ちゃん 2
市原市迎田229－3
TEL 090-2629-9600 藤野美代

魚屋の戯言

発酵の文化

人類が作り出した文化の一つに発酵食品があります。

冷蔵庫に醤油、味噌・酢・みりんなどの調味料、日本酒・ビール・葡萄酒などの酒類やコーヒー・紅茶・烏龍茶の嗜好飲料があるご家庭が多いでしょう。

その他の食品でもパン・納豆・漬け物・鰹節・塩辛・関東風のくずもちなどなど、私たちの身近にあるものだけを数えあげてもきりがありません。

発酵食品は素材となる食品を微生物の作用を利用し、そのまま食べるより風味を増したり保存性を高めたりしています。

現在では科学的な研究も進み、発酵が微生物の働きによって起こるという事が解明されていますが、以前は単に経験則で「どうもこうするとこうなって食べ物が美味しくなるようだ」と考えられていたようです。さらに発酵食品の特長の一つに栄養が身体に吸収されやすくなる事が挙げられます。納豆独自の成分ナットウキナーゼには血液の状態をよくしてくれる事が知られていますし、他の食品だとコラーゲンの吸収率は10%前後なのにのイカの塩辛は90%も吸収してくれるのです。

発酵食品の起源は遊牧民が皮の袋に牛乳を入れて運んでたらいつの間にかチーズになってた話や、当時、文明が発達していたギリシアや中近東地方で葡萄酒を作っていた事が分かっていますが、どれも数千年前の話と聞いた時は、その頃と同じようなものを口にしてるんだと思って少々感慨深いものがありました。

微生物と食品の話をするとどうしても避けて通れないのが腐敗です。どちらも食品に微生物が働いて分解する事に変わりありません。食品の内の糖に作用してアルコール分や乳酸ができるのが発酵、タンパク質に作用して不快な匂いを発するようになるのが腐敗ですが、例外もあるので一概には言えません。ごくごく大雑把に言えば微生物の働きで食品が美味しくなるのが発酵、嫌な臭気を発して食用に適さなくなるのが腐敗と考えて差し支えないようです。それでもある特定の地域にのみ伝わる発酵食品の中にはその地域以外の人にはとても食用とは思えないものが数多くあります。初めて納豆を見た外国人はその見た目と臭気に圧倒されると聞きますし、くさやの匂いをすぐに受け入れられる人は多くないでしょう。北欧には世界一臭い食べ物と言われるニシンを発酵させた缶詰があって、これは屋内で開缶する事が禁止されているくらいの強烈な匂いを持つにもかかわらず、その地域の方々にはたまらない美味として受け継がれています。

細菌やカビと言うと人間によくないものというイメージが強いのではないかと思いますが、細菌・カビの生み出す酵素のおかげで食品が熟成したり、旨味成分のイノシン酸やグルタミン酸が増えてより美味しくなる食品があるのもまた事実なのです。

発酵と同じく食品を加工して保存性を高めたり、より複雑な旨味を与えるものに燻製があります。先人の工夫と努力に感謝しつつ、ウイスキーとスモークチーズで発酵と燻製を一度に楽しもうと欲張る秋の夜の魚屋でした。

（鈴木里山通信員）

市原商工会議所ニュース

講演会「銀座のママに学ぶ」

10月5日（月）に行われた市原青年経済人交流会の定例会では、銀座「クラブ稲葉」ママ・株式会社白坂企画代表 白坂亜紀氏を講師に招いて、「銀座のママに学ぶ　経営力・人間力　～一流の“接待”と“おもてなし”～」というテーマで講演をしていただきました。白坂氏は1980年代後半のバブル期に日本橋の老舗クラブにて学生ママとなり一躍有名人に。銀座という厳しい競争の世界でバブル崩壊、リーマンショックを乗り越え長年にわたり第一線で活躍され、現在ではGSK(銀座社交料飲協会)銀座緑化部長として、銀座ミツバチプロジェクト、緑化活動・銀座里山計画への参加や、銀座から日本文化を発信する「銀座なでしこ会」を発足するなど幅広い活動を展開しています。

銀座のホステスさんは感覚的には個人事業主で、ホステスさんはクラブという場所を借りて各自が個人プレイヤーとしてお仕事をしており、できるホステスさんは朝8時には起床して、お客様にお礼のメールや営業活動、話題づくりの為の情報収集など忙しく、24時間、365日お仕事から離れられないそうです。ホステスさんのシビアな一面として、彼女たちには売上額、同伴回数等、厳しいノルマがあり、ノルマを達成できない人には戦力外通達がなされるそうです。銀座で働き続けられるホステスさんはほんの一握りで、その中でママになれるのは1万人に1人だそうです。また、クラブ自体の平均寿命は平均5・6ヶ月ほどで本物の接待・サービスができないお店は淘汰されていく厳しい世界だそうです。

では、その本物の接待・サービスとは何かといえば、それはおもてなしの心(相手を思いやる心)だそうです。滝川クリステルさんが東京オリンピック招致スピーチで使用して流行語大賞にもなった「お・も・て・な・し」です。日本では落し物をしてもそれはきっと戻ってくる。それは拾った人が落とした人を思いやり交番に届け出るからだという。日本人はこのおもてなし・思いやりの精神が高く世界に誇れるものであるといいます。

白坂氏は数多くの一流と言われるできる男性を見てきました。そんな男性たちの共通点は以下の通りです。

1. 心遣いがある。接待される側、接待する側、部下にまで気配りができるサービス精神があり、みんなを楽しませる。そんな人は「この人のために頑張ろう」とみんながついてくる。
2. 人によって態度を変えない。弱いものいじめや、上司や取引先への過剰な平身低頭ぶりは興ざめ。表裏がある人は信用されない。
3. 変化する勇気がある。老舗のお店は伝統を守るだけではなく、常に時代の変化を察知し、対応しているからこそ生き残る事が出来る。人も同じ。
4. 早寝早起き。健康管理ができる人。仕事ができても、ここぞという時に体調を崩しチャンスを逃した人を数多く見てきた。
5. 逆境につよい。地方へ左遷させられても、腐らず努力し続けることで復活して東京へ戻ってくる人がいる。

華やかで、終始にこやかにお話する早坂氏でしたが、一言一言に厳しい世界で生き抜いてきた重みが感じられ、銀座、日本に対する深い愛情が感じられました。

（景山里山通信員）

編集後記

加茂里山通信を発行し始めてから12年半になります。年4回の発行で今号が50号目になりました。その記念にオールカラーでの発行としました。写真だけでなく、スポーツ新聞のようにタイトルや広告にもカラーを使ってみました。写真の鮮やかさは白黒とは全く別格です。毎回こうであればいいのですが、そこは経済的理由で無理なので、記念号あるいは余裕ができてどうしてもカラーで届けたいという時にはカラー発行にしたいと思います。

秋はこの里山でも行事が目白押しです。敬老会、体育祭、高滝神社の例大祭、公民館まつりや産直祭り、イルミネーションの飾りつけなど。あたふたしている間に柿は熟していき、ススキの穂は赤くなり始め、山のつる系の色付きから始まり、広葉樹の紅葉へと移っていき、秋は深まりを増していきます。スーパームーンを見た日から朝晩が冷え込むようになり、秋晴れのさわやかさと、青く澄んだ空と高い雲。当たり前のように季節が移り変わり、日々の営みが続きます。難民のニュースや紛争地帯の映像を見るにつけ、そんなごくごく当たり前のような日常がものすごく幸せなことだと感じます。山菜の採れる山があり、田圃があり、川があり、湖があり、迷惑ながらイノシシも猿も鹿もいて、一年中花を見ることができ、のどかな鉄道にトロッコ列車が走るようになり、その里山に私たちが暮らしている。

そんな喜びをかみしめながら、地域の情報発進をこれからも続けていきたいと思います。

（征矢里山通信員）

次回は1月25日発行予定です。

情報提供、取材依頼はお近くの通信員へ。
メールでも受け付けます。
紙面及び記事に関するご意見、お問い合わせは左記へ。

市原商工会議所
0436(22)4305　担当　河崎
メール　kawasaki@i-cci.or.jp

房総・養老渓谷の地酒お土産は

養老渓谷駅前
角屋商店
養老渓谷観光協会窓口
市原市朝生原181
TEL0436-96-1108
FAX0436-96-0052

愛車のある幸せな暮らし
応援します！
安全・安心
有限会社　全日本ロータスクラブ加盟店
小茶自動車
市原市石神227
TEL0436-96-0482
FAX0436-96-1293

皆様と共に歩む観光

ワカサギ釣り解禁！
高滝湖観光企業組合
TEL　0436-98-1277

加茂里山通信

平成２８年
新年号

発行　市原商工会議所
加茂里山通信編集部
編集長　　征矢貫造

月出校舎から月出工舎へ！

加茂地区の５つの廃校舎の中で一番早く廃校となった旧月出小の校舎が生まれ変わります。２０１４年のアート×ミックスの際には校舎内のものが大胆に取り外されたり片付けられたりして、校舎、校庭、プール、そしてその上の台地まで活用され、多彩な企画が展開されました。その月出校舎の利活用計画が総務省の地方創世に関わる公募に応募して採択され、リノベーション（既存の建物に大規模な改修工事を行い、用途や機能を変更して性能を向上させたり付加価値をあたえること）が始まっています。どのような経緯を経てどのように変わり、どのような方向に向かっていくのか。月出工舎の岩間　賢（いわま　さとし）さんに思いを語っていただきました。岩間さんは１９７４年生まれの千葉県出身の美術家です。

（編集部）

皆さま、明けましておめでとうございます。今年は「月出工舎」の真価が問われる年となります。この一年が正念場だと心得て精一杯努力する所存です。

この紙面を拝借して、これまでの「月出工舎」のこと、取り組みをはじめようとしていること、今から地続きの１０年後の未来になにを目指していこうとしているのかお話しをさせていただきます。

これまでの経緯

現在、日本が抱える問題の縮図と例えられる市原市の現状において、特に南市原では少子高齢化の進行による過疎対策と地域活性化計画が必要不可欠となっていることはご存知の方も多いと思います。そうした中で２０１３年春に市原市に小中一貫教育校「加茂学園」が誕生し、南市原では４つの小学校が閉校しました。

２０１４年に市原市では、大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭などで総合ディレクターを務める北川フラム氏を迎え、課題解決型芸術祭として「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス」を開催しました。この開催に合わせて、わたしは２０１１年より市原市の白鳥公民館を拠点に舞踏家の松原東洋氏をメンバーに加えて、ちんどん屋という表現方法で養老渓谷をはじめとする市内各所を練り歩きながら少しずつ何ができるか考えていきました。その中で里山芸術劇場をつくる企画を立案し、２０１４年の国際芸術祭では「よほろ～養老舞踏バラエティーショウ！～」の公演をしました。その後、この里山芸術劇場は海外招聘作家を中心に白鳥エリアは展開されることになりました。

これと並行して「廃校を拠点に新たなプラットホームを創出したまちづくり」を進める計画があると北川氏からの説明を受け、市原市をはじめて訪れた２０１１年に月出る処（つきいづるところ）の地名が気になり辿り着いた、旧月出小学校のことを改めて思い起こしました。こっそりと通いはじめたのが２０１２年の夏頃でした。

そして北川氏と協議を重ね「月出の森」構想をまとめ、２０１４年にその第１期の基本プラン「月出創生計画」を実施する拠点に選んだのが旧月出小学校です。

月出工舎

廃校となった旧月出小学校を舞台に「遊・学・匠・食」の４つのプロジェクトを展開し「みんなでつくる新しいがっこう」として「中房総国際芸術祭　いちはらアート×ミックス」に合わせて開校したのが「月出工舎（ARS TSUKIDE）」です。

今から地続きの１０年後の未来を多視点な角度から捉え、美術も・建築も・音楽も・デザインも・ダンスも・農学も・社会学も・生命研究も・分野や世代を超えて共振する場をつくり、新しい世界観・知を創生することを目指しています。

ARS（アルス）とはARTの語源となるラテン語であり、「技・手腕・技術・学術・技芸・手仕事」を意味し、「技術の理論・法則・手引き」や「芸術の仕事・作品」という意味まで含みます。

「月出工舎」を開校させるために、地球規模の視野で考えながらも地場視点で表現活動をしている塙月洋生（建築家/岐阜在住）・岡博美（染織家/三重在住）・チョウハシトオル（焼芋家/神奈川在住）・高岡友美（東京在住）と永森志希乃（富山在住）ユニットである風景と食設計Hoo（クリエイター）を招聘して活動を開始しました。海外からは田中奈緒子（美術家/ドイツ在住）・竹村京（美術家/ドイツ在住）・XIAOMING（彫刻家/中国在住）を招聘してアーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）のプログラムを実施しました。（活動詳細ホームページ　http://tsukide.jp）

今から地続きの１０年後の未来をつくる「月出の森」構想

これまでの活動は「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス」の開催を通じて、創ることを生業にしている表現者が中心となって課題と解決の方法を提示しつつ、朦朧とした先にある不確かなようで確かなにかを探りながら取り組んできました。

これからは地域住民の方々をはじめ、これまで共に活動をしてきた菜の花プレイヤーさん、新たに出会う方々と真と信を考え、その先にある感幸の意味を問うことが必要になっていくと思っています。

「月出の森」構想では、月出る処に存在する森（＝ヒト・モノ・コト）にある様々な環境（例えば、水源地・寺社・空き家・竹林・県営キャンプ場・ゴルフ場・畜産・農地・放棄地など）をARS FIELD（アルス フィールド）の場として再定義した活用方法を、地域住民×協働者×表現者が産・官・学・金・福・労・言（産＝産業・官＝役所・学＝教育と研究・金＝地域金融・福＝福祉・労＝労働・言＝地域メディア）との多様な交流とぶつかりを図りながら、市原市独自の「創ること・生きること」の革新的価値をつくっていくことが重要です。

革新的とはその土地にある地域特性や宝を発見・紡ぐこと、それらを発信するだけでなく、活かす方法をつくることだと考えています。時には前向きに諦めることを何よりも真剣に考えることも大切なことではないかと思うようになってきました。

総務省「公共施設オープン・リノベーション（マッチングコンペティション）」の採択

２０１５年９月３０日に「旧月出小学校の利活用」の計画が採択され、総務省の地方創生に関する実証調査事業として、同省が提案自治体である市原市と委託契約を結び事業化（全国８自治体が採択）を進めています。

市原市が課題解決型芸術祭として事業を実施した「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス」は様々な問題が提示されたことは誰もが感じているはずです。課題を発見するという目的は達成できたわけですが、目先の課題解決に追われてしまい、その先にある活かす術と姿を構築できていなかったと思います。

芸術祭閉幕直後から「月出工舎」の活動にご理解をいただいていた月出町会をはじめ、主体的に取り組んでいただいた菜の花プレイヤーさんには霧の中での活動状況が続いている時期も長かったわけですが、志と想いをもって関わっていただいたことが総務省から大きく評価されました。また、市原市の「廃校を拠点に新たなプラットホームを創出したまちづくり」の未来創造の評価が高かったことが採択理由となっています。

「月出工舎」として提案した内容や他の自治体の採択情報などは、総務省のホームページから閲覧ができます。この紙面をお借りして、多大なご協力をいただいたみなさまに心からお礼を申し上げます。

「みんなでつくる新しいがっこう」は、これからが本当のはじまりです。本年４月にスタートできるよう１月５日から第２期の改修工事がはじまりました。並行して「月出工舎」の持続的運営と「月出の森」構想を実現するために一般社団法人Creative Lab SPICA（代表/岩間賢）を立ち上げたことをご報告します。